幼児期から児童期における
子どもの思考の共有・深化に関する研究

細野　美幸（初等教育学科・准教授）・佐藤　康富（初等教育学科・教授）
小泉　裕子（初等教育学科・教授）・真宮　美奈子（児童学科・准教授）
幸喜　健（初等教育学科・准教授）・関川　満美（初等教育学科・講師）

問題

OECD による PISA 型調査の結果から、日本の子どもの問題解決に対する意欲の低さが指摘され（OECD, 2013）、多くの子どもが複雑な問題に粘り強く取り組むことを避ける傾向にあることが明らかになった。しかし、社会のグローバル化が進む中、人々の価値観やツールも多種多様となり、容易に解決可能な出来事だけに対処するわけにはいかない現状になりつつある。日常生活の様々な問題や葛藤場面について自分なりに思考し、考えを深め、発展させていく力を育むことは、幼児期・児童期の教育に求められる重要な課題の一つになっていると言える。

ヴィゴツキー（Vygotsky）は、発達理論「発達の最近接領域」において、子どもの発達を促すものとして他者との関わりが重要であると述べている。日本の幼児教育・保育に関する研究からも、青年期と異なる幼児期独特の思考力の発揮の仕方として、やはり「人との関わり」が重要である可能性が示されており（内田ら, 2014）、特に協同活動における子ども同士の話し合いや保育者の関わりが幼児の思考の深化を促すことが示されている（佐藤, 2018）。

しかし、協同活動における関わりの中では多種多様な相互作用が起きるだろうと考えられる。子どもの思考力を質・量ともに変化させるようなものもあれば、単なる表面的な行動の模倣に終わり、思考力に影響を与えないケースもあるだろう。従って、どのような相互作用が子どもの思考力の発達に結びつくのかについて、詳細に検討する必要があると考えられる。

また、児童期に入ると子どもの社会性・協調性がいったん低下することが示されている（ベネッセ教育総合研究所, 2012）ことから、協同活動における相互作用の内容や思考力に与える影響は、幼児期から小学校入学後にかけて変化する可能性が考えられる。幼児教育から小学校教育への円滑な接続が重視されている中、幼児期から児童期への移行に伴う人との関わりや協同活動の変化が思考力に与える影響について検討し、また、保育者・教師の関わりの効果の実際についても明らかにすることで、より良い指導・援助や接続の形を考えていくことが可能になると考えらえる。

目的

本研究の目的は、幼児期から児童期を対象に、子どもが思考力を発揮する時に仲間あるいは保育者・教師との間にどのような相互作用が起きているのかを調べ、その相互作用の特徴が加齢に伴いどのような発達的変化を示し、そして、「人との関わり」のどのような

側面（要因）が子どもの思考力の発達に影響を与えるのかについて明らかにすることである。

研究の計画

1．年度計画

本研究では幼児および児童を対象に、仲間同士の相互作用が思考に与える影響について検討する。また、子どもと教師との関わりが思考に与える影響について、発話プロトコルを用いて質的に検討していく。

【2019年度】5歳児の活動を中心に、日常生活の中でどのように問題解決を図っているのかを分析・検討する。また、幼児教育の先駆的実践をしているスウェーデンの教育を視察・調査する。

【2020年度】小学校の1年生の活動を中心に、日常生活の中でどのように問題解決を図っているのかを分析・検討する。また、子どもの思考共有支援（SST）で世界的に効果をあげているイギリスの教育・保育を視察・調査する。

【2021年度】子どもの問題解決場面を検討しながら、発達段階における思考力の深化について検討する。保育者・教師の発話についても発話プロトコル分析を行い、効果的な指導・援助の方法や役割について検討する。

2．研究の方法

研究で用いる主な方法は下記の通りである。

【対象】5歳児（2019年度）、および、小学校1年生（2020年度）

【材料】必要となる思考タイプが異なる課題を2種類用意する。

①「創造性課題」：創造的思考を求める課題。折り紙で自由な作品を作るよう求めるものを予定している。

②「収束性課題」：収束的思考を求める課題。解が一つに収束するものであり、見た絵画の内容を再生するよう求めるものを予定している。

【手続き】参加者を「2人組条件」「1人条件」に分けて実施する。1人条件では、参加者1名に対して創造性課題および収束性課題に取り組むよう求める。2人組条件では、参加者2名にペアで参加してもらい、2つの課題に「二人で一緒に」取り組むよう求める。

撮影されたVTRから、発話データを起こし、課題の遂行過程と2者間のコミュニケーションのタイプの関連性について明らかにする。また、必要とされる思考のタイプ（課題）によって関連性に差が生じるか、生じる場合、どのような違いが見られるのかを明らかにする。

研究の進捗

2019年度9月、ストックホルム大学名誉教授のグニラ・ダールベリ（Dahlberg, G.）から幼児教育に関する最先端の視点を学ぶことを主な目的として、共同研究者4名がスウェーデンでの研修に参加した。

グニラ・ダールベリとピーター・モス（Moss, P.）（Dahlberg, G., & Moss, P., 2006）によると、世界的に注目されているイタリアのレッジョ・エミリアの諸学校は、グループの他の子どもたちを学習のツールとして位置づけ、互いに刺激し合い共に知識を構築してい

く方法を活用した。レッジョ・エミリアの子どもたちは世界の教育者や芸術家が驚くような表現力や思考力を示すようになったが、このような方法を用いた教育はヴィゴツキーの発達理論「発達の最近接領域」の実践として受け止めることができる。

研修では、グニラ・ダールベリに会い、レッジョ・エミリアのアプローチやスウェーデンで実践されている就学前教育に関する教授を直接受けることができた（Figure 1 ）。また、スウェーデンの就学前教育を視察し、様々な示唆を得ることができた（Figure 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 ・ 6 ）。

現在、研修の学びを共同研究者間で共有し、また、5 歳児を対象にした実験研究の課題作成等の準備を進めている。（2019年 7 月に鎌倉女子大学倫理審査委員会の審査を通過、通過番号：鎌倫-19008を取得）。

Figure 1　ダールベリ先生と共に

Figure 2　トースヴィック就学前学校視察

Figure 3　カンナン就学前学校

Figure 4　ひまわりのドキュメンテーション

Figure 5　子どものファンタジー溢れるドキュメンテーション

Figure 6　就学前学校にあるアトリエの風景

引用文献

Dahlberg, G., & Moss, P.（2006）La Nostra Reggio Emilia1 Rinaldi, c. In Dialogue with Reggio Emilia, Routledge.（ダールベリ G.・モス P.(2019）リナルディ C. 里見実（訳）レッジョ・エミリアと対話しながら：知の紡ぎ手たちの町と学校，ミネルヴァ書房 pp.1-31）

OECD(2013)．Country-Note:ProgrammeforIntaernationalStudentAssessment(PISA)Result from PISA 2012.（https://www.oecd.org/pisa/keyfindings/PISA-2012-results-japan.pdf）

佐藤康富（2018）. 幼児期における思考力の深化過程に関する研究　鎌倉女子大学紀要, 25, 89-99.

田村 徳子・荒牧 美佐子（2012）. 子どもの学びの育ち　ベネッセ次世代育成研究所幼児期から小学1年生の家庭教育調査報告書, 26-45.

内田伸子・津金美智子（2014）. 乳幼児の論理的思考の発達に関する研究―自発的活動としての遊びを通して論理的思考力が育まれる―　保育科学研究, 5, 131-139.

ヴィゴツキー　柴田義松（訳）(2001). 思考と言語　新読書社